弱視の子どもを親や教師はどうやって支援すればよいか？

May 24, 2003
青木 慎太朗

１．小学校時代の私（＝統合教育）

（１）原学級でのサポート
（２）養護学級でのサポート
（３）親のサポート
（４）盲学校との関わり
（５）統合教育の問題点と課題

２．中学・高校時代の私（＝盲学校）

（１）授業
（２）人間関係
（３）大学受験に向けたサポート体制

３．大学での弱視者支援 ～同志社大学の場合を中心に～

（１）教科書
（２）設備
（３）講義での配慮
（４）情報提供
（５）その他のサポート

４．情報化社会と弱視者（支援）

（１）書籍の電子化
（２）辞書の電子化
（３）インターネットと情報
（４）「読書権」と「著作権」
（５）美術館アクセシビリティー
（６）今後の見通し

まとめ ／ 参考資料

１．小学校時代の私（＝統合教育）

小学校の時、私は統合教育を受けていた。校区が出身幼稚園と同じだったため、メンバーは一緒だった。小学校時代の仲間は、「弱視の私がいる」事を当然のこととして受け止めてくれていたと思う。どの程度見えているのか、何ができて／できないのか、彼らははじめから身近な環境の中にいる私を理解し、また私もそれに甘えていた。「慎ちゃんは落とした消しゴムが探せない」「慎ちゃんはトイレに一人で行ける」「鬼ごっこなどで遊んでいる時に自分たちが逃げていってもついてくる」など。

しかし、私は５年生の時に転校を経験し、先に述べたようなことがまったく通用しない世界に放り込まれることとなった。新しい環境で出会った仲間の私に対する理解は、「遊んでいる時には追いかけてくるのに、落とした消しゴムが拾えないなんておかしいだろ」といったものだった。だから、「本当は見えているのに、都合の悪い時だけ見えていないふりをしているんだよ」などと誤解され、陰口を言われたこともあった。もちろん、それまでは「やってもらって当然」のように考えてしまっていた仲間からのサポートを、転校後も当然のように思い込み、「消しゴムが無い、探してくれ」といった形で偉そうに頼んでいた私にも今思えば原因があるだろう。しかし、何と言っても、弱視という「分かってもらいにくさ」があることは確かだと思う。大人でさえまともに理解できない弱視を、小学生が理解できるとは思えない。どのように相手に分かってもらうか、ということを考えさせられた時期であった。

（１）原学級でのサポート

原学級での授業は単眼鏡を使って黒板を見、プリントやテストは拡大コピーをしてもらい、教科書は拡大コピーをしたこともあったが、むしろ弱視鏡を使って読んでいた。しかし、本を読むのが遅く、本の嫌いな子どもだった。本読みの宿題もあったが、全然していなかった。

（２）養護学級でのサポート

私の小学校には弱視学級などといったものはなかったため、原学級で足りないところは養護学級でフォローしてもらっていた。原学級と養護学級との関わりは学年によって、そして転校の前後によって違いがあるが、概ね次のようなものについては養護学級で学習していた。

・図形（算数）
・地図（社会）
・図工
・書写

また、体育については、陸上関係種目は原学級で受講し、球技関係の時は養護学級に行っていた。

原学級と養護学級の２つに在籍していたため、双方から宿題が出され、大変だった。（実際には原学級の方はさぼっていた…）

（３）親のサポート

家庭では、漢字テストの前日などに書取の特訓をしてもらっていた。書取テストでは、漢字のはね・止め・はらいなどが重視され、縦棒の本数が一本多いとかで減点される。これらは本を見ただけでは私には正確に分からず間違いがちだったため、親が大きめの字を書いて教えてくれた。

また、地域のボランティアサークルに色分けした地図を作ってもらい、養護学級の学習するとともに、家でも勉強していた。

なお、私はテストの成績などほとんど気にしなかった。テストの前日でも本当は勉強する気はなかったのだが、友達のお母さんから母親にテストの情報が入り、仕方なく勉強机に向かわされていたというのが実際である。

親のサポートというのは、決して勉強のことだけではないはずだ。勉強面でのサポートなら、養護学級でもできなくはない。親が何をやるべきか、という問題になると、単に勉強のサポートを充実させればよいというのは間違っている。

一つの例を挙げて説明したい。私が飛行機に興味を持っていた頃、父親が日曜に大阪（伊丹）空港に連れて行ってくれた。双眼鏡で飛行機を見、父が飛行機の写真を撮り、いろいろと教えてくれた。一人で空港に行っても、今どの辺りにいる飛行機がどういう動きをしているか、といったことはなかなか理解できない。その子の興味に合わせて好奇心を満足させてあげることができるのは、やはり親なのだと私は思う。

（４）盲学校との関わり

実は、盲学校との関わりということでもないのだが、盲学校のある先生のご厚意により、週一回盲学校に通って点字を教えてもらっていた。私の視力で今後どこまで墨字でやっていけるか、ということに不安があったためだ。

これ以外にも、私の知らないところで盲学校とはいろいろな関わりがあったようであるが、私が覚えていないので、これ以上は何とも言えない。

（５）統合教育の問題点と課題

私は中学校進学時点で統合教育に別れを告げた。それは、統合教育における問題点を痛感し、地域でともに学ぶ仲間と別れてでも、片道一時間以上もかかる盲学校に毎日電車通学する方がよいと親子で判断したためである。

私は小学校の時、学校側のサポートに対して目立った不満は抱いていなかったと思う。しかし、多くの問題を抱えている人もいるようだ。何も弱視者に限ったことではないが、原学級で習得できない部分をどうやって補っていくか、また原学級での授業の際、教師はどのような配慮をするべきかなどといった問題について、今後一層考えていく必要があるであろう。

私の経験から言えることは、仲間や教師にどうやって自分のことを分かってもらうか、ということが最も重要であるということである。かつての私のように誤解され、辛い思いをしないためにも、単に視力を数字で示すだけではなく、具体的にどういう事は自分でできて、どういう事は周りの援助を必要としているのか、ということを、

仲間や教師に伝え、理解してもらうことである。

親と教師、担任と養護学級の教師との連携はもとより、弱視教育についてのノウハウを有する盲学校との連携体制も必要になってくる。統合教育が進む中で、こういったことができているかどうかということが、重要なポイントになってくるであろう。

そして、弱視児をもつ親どうしのネットワーク・情報交換の場も極めて重要であると言える。今後ますます充実していってほしい。

２．中学・高校時代の私（＝盲学校）

中学・高校という時期は、将来を見据えた重要な時期である。私が盲学校を選択したのは、地域の学校で晴眼者ペースの授業で学習するよりも、きめ細かな指導が受けられる盲学校の方が良い。友達に誤解され、いじめられて、そんなことで悩んだりしているよりは、同じく障害をもった者どうしが学んでいる盲学校の方が良い、と思ったからである。私は（たぶん親も）この時期から、将来は大学に行くことを意識していた。子どもどうしで遊ぶことも重要であるが、それはむしろ小学校段階であり、実際地域を離れて私立の中学校に行く人もいるわけであるから、私自身、正直なところ、盲学校に進むことに何ら迷いはなかった。

（１）授業

盲学校の授業は１クラス４人（私の中学部時代：大阪府盲）で、丁寧な指導が受けられた。配布されるプリントは全て拡大されており、白地図が事前に色分けされているなどということもあった。

体育についても、これまでできなかった球技が、盲学校でのルールに従えばできるということが、私には喜びだった。盲人野球・盲人バレー・盲人卓球など。

さらに、実技系科目は、きめ細かなサポートのおかげで、私にとってはたいへん充実していた。

（２）人間関係

１クラス４人、しかも全員が視覚障害者というのは、特殊な人間関係としか言いようがない。私のように、一度地域を経験した者はよいのだが、ずっと盲学校で生活してきた人は、盲学校を出た後、人間関係がうまくいかないこともあるようだ。それは、盲学校では当然のことでも、普通の人間関係においては全く普通ではなく、そのへんのことを分からずに育ってきたことの弊害である。

したがって、盲学校で学ぶ場合、そこでの人間関係は世間一般からすれば特殊な人間関係なのだということを、何らかの形で本人に理解させる必要がある。それを怠ると、例えば大学進学後などに一般の学生と上手くやっていけないということにもつながりかねないのである。

（３）大学受験に向けたサポート体制

「盲学校は進学校ではありません」という言葉に、私は高等部時代悩まされた。もっとも、それは明らかなことである。しかし、教師がこれを口にすることによって、進学指導はしないということを私たちに伝えているのである。

もとより盲学校は、専門教育課程（専攻科／専修部などの名称がある）に優秀な生徒を送り、将来は鍼灸師などの視覚障害者固有（？）の職業に就かせるために創設されたという歴史をもっているし、今日でもこれが継続されなければ、学校の体制は維持できない。点字・拡大文字などの受験を大学が徐々に認めはじめ、それによって視覚障害者が盲学校から離れていったのでは、盲学校というもの自体がやっていけなくなる。実際、今日では専門教育課程の高年齢化が進み、学生のほとんどは中途失明者で、内部進学者が少数という状況である。学校側の心理として、優秀な若い学生に残ってほしい、というのは、ある意味当然であろう。しかし、学校のために生徒がいるのではなく、生徒のために学校があるわけだから、これがおかしいことは自明である。

本来、高校は入学の時点である程度成績別に分かれており、その集団のレベルに合わせて教育することができる。しかし盲学校は、成績ではなくて視覚障害の有無によって分けられているわけだから、一般校のような教育は困難な面もある。

それにも関わらず、私があえて盲学校を選んだのは、次のような策略があったからである。

まず、学校の授業は簡単で構わない。その方が定期試験の成績が高得点になる。

次に、受験指導は学校に期待するのではなく、予備校に通えばよい。予備校はまさしく大学受験のプロである。

そして、推薦入試を使うなら盲学校の方が有利である。成績などの条件さえ満たしていれば、学内で推薦が拒否されるなどということはほとんどない。

結果的に、私の作戦勝ちだった。高校進学時点の自分の成績では同志社大学には行けなかったと思う。

さらに、学校を挙げての受験指導はしないまでも、先生が個人的に支援してくれるケースが多かった。

３．大学での弱視者支援 ～同志社大学の場合を中心に～

最後に、大学進学以降のことについて触れてみたい。

（１）教科書

大学進学以降は、自分にどのようなサポートが必要かといったことは自分で大学に要望するというのが通常である。

教科書をはじめ、授業を受ける上で必要な資料については、大学側に要求すれば拡大しいてもらえるケースもある。私は要望していない。また、これはあくまで大学によって異なる。

（２）設備

私は大学側に対してパソコンの購入を要求し、昨秋実現した。２２インチのディスプレイやスキャナなどが付属されている。また、ルームナンバーの表示などについても、見やすくするよう配慮を求めている。

この他、拡大読書機は私の入学以前からあった。

（３）講義での配慮

講義に際しては、配布資料の拡大、板書の読み上げ、試験問題の拡大と時間延長・別室受験、映像教材の解説などを要望し、概ね実現されている。なお、最前列座席の確保についても要望すべき事項であるが、幸か不幸か、大学の教室は後ろから埋まっていくため、最前列の座席が確保できずに困ったという経験はない。

（４）情報提供

休講や試験の時間割といった情報は、事務室から個別に連絡をもらえるようにしている。なお、同志社大学では休講情報が Web でチェックできるようになっている。

ただし、情報の送り手であるところの大学に情報保障を要望するのは当然として、とりわけ情報が錯綜している今日においては、どこまで責任をもたせるべきかといった問題があるのは事実である。

（５）その他のサポート

大学院に進学した今年度より、対面朗読を申し込んだ。当初人数が集まらず苦戦し、私自身のストレスになっていたが、現在では１日２名程度協力してもらえる環境になっている。（時間割と照らし合わせれば、１日２名程度が無難）

その他、私の要望により、同志社大学の学食（運営は生協）には優先座席が設置されている。

４．情報化社会と弱視者（支援）

私の生い立ちに即して、現在に至るまでの話を展開してきたが、ここで最近の情報化社会が我々弱視者を取り巻く環境をどう変化させたかという点に触れて、締めくくりたいと思う。

（１）書籍の電子化

最近、電子書籍が流通し始めている。タイトル数こそまだまだ少数であるが、これからますます増加すると思われるこの媒体について、弱視者の読書環境にどのような変化をもたらすのかを考えてみたい。

これまでは、予め印刷された媒体があり、受け手側がそれに合わせるしかなかった。弱視者をはじめ高齢者もそうであるが、眼鏡などを用いないと、文字情報にアクセスすることはできなかった。

しかし今日、電子化された情報が流通し始めると、受け手側が自分の受信しやすい形態で情報を入手できるようになってきている。データでもらった情報は、画面上で拡大表示することもできるし、色のコントラストも見やすく変更できる。画面を長時間見ると目が疲れるなどといった場合は、拡大文字として印刷することも可能である。（予めレイアウトの鋳型を作っておくと、後はテキストを貼り付けるだけで OK）

教科書の拡大配布が議論されているが、私はこれは時代遅れな議論でしかないと考えている。仮に拡大本ができたとして、それで全ての弱視者が教科書に問題なくアクセスできるかと言えば、決してそうではないからだ。データ版さえあれば、その人その人の見え方に合わせたカスタマイズが可能である。

以前、老人介護の問題で、あるところに書かせてもらったが、サービスの提供者側が一方的に物事を決めるという時代はもう終わった。これからは order　made の時代である。大量生産・大量消費というシステムに適応できない少数者（社会的弱者）に関しては、特にこの考え方が重要である。

（２）辞書の電子化

一般書籍と同様、いや、それ以上にアクセス困難なものが辞書であると思う。膨大な量があるため、文字を小さくせざるを得ないという理由からだ。

しかし、パソコンの普及に伴って、広辞苑・英和辞典・六法全書などが CD-ROM 化され、細かい文字が読めなくともアクセスが可能な時代になってきた。辞書の引き方を学ぶ時間に、パソコンでの辞書検索のやり方について指導してもらえるよう学校側に要請されるのがよいかと思う。（私が盲学校に在籍していた５年前、盲学校ではまだこうした指導は為されていなかった）

（３）インターネットと情報

インターネットの普及により、情報収集には主にインターネットを使うという人が増えてきた。特に我々視覚障害者にとっては、画面を自由にカスタマイズできるという点で、非常に便利なツールである。

新聞をはじめとする多くの情報がインターネットで入手可能である。もっとも、必要以上に情報が錯綜している世界であるから、その取捨選択をできる眼を養わなければならないが、使いこなせて損はない。

（４）「読書権」と「著作権」

権利と権利のぶつかり合いの一つとして、「読書権」と「著作権」が挙げられる。著作権者の権利を保護する法律として著作権法があるが、視覚障害者の読書権を保障する法律は特になく、著作権法の中で点訳について認められているに過ぎない（著作権法３７条）。

最近では、書籍のテキストデータ提供が一部で行われているが、これはあくまでも著者や出版社の「ご厚意」であって、決して権利として保障されるものではない。法制度改革が求められるだろうが、同時にデータは即時に複製可能なため、著作権者の

権利を考える上での課題も多いことは事実である。

（５）美術館アクセシビリティー

これまで視覚障害者とは無縁の世界であるかのように捉えられてきた美術館。しかし、弱視者に限っていうならば、この考え方自体、すでに過去のものとなりつつある。

ガラスケース越しに展示物を眺めたり、絵画を鑑賞するというのは確かに困難である。しかし最近では、貴重書や絵画のデジタル化が進み、インターネットから見ることもできるようになってきた。美術館にすら置いていない、専門家でなければ見せてもらえないようなものまで、ネット経由で見ることができる。

新しい形態での芸術へのアクセスも取り入れるべきではないだろうか。

（６）今後の見通し

今後情報化が進むことは言うまでもない。そしてそれが我々弱視者にとって便利になるであろうことはすでに述べたとおりである。

高齢化が進むにつれ、視力の悪い高齢者も含めた弱視者人口は、今後ますます増加することが見込まれる。従来の福祉領域のみならず、市場においても弱視者対策が迫られる時代がくる。弱視者にも使いやすい商品を作れないような製造業、弱視者対策ができないようなサービス業は、高齢化が急速に進む日本の中で、自然に淘汰されることになるであろう。例えば、現に携帯電話業界が、メール画面の文字サイズを大小さまざまに選択できるような商品を作っている。

しかし、だからといって、「お任せ」の姿勢では何も変わらない。弱視者の声は全盲者の声に比べて小さいとよく言われている。積極的に声を挙げ、社会に働きかけていかなければならないであろう。自分は我慢するからよい、等というのは、もっともタチが悪い。自分より後に生まれてくる人たち、今は晴眼者でも高齢や疾病などで将来弱視者になるような人たちに対し、弱視の先輩としての自覚が重要なのではないかと思う。自分の経験した苦い思いを、後輩には経験させたくない、という風に考えて欲しいと思う次第である。

まとめ

今回「弱視の子どもを親や教師はどうやって支援すればよいか？」と題して議論を展開させていただいたが、①親と教師の連携が重要であること、②（特に親には）先輩意識（＝責任感）を持ってほしいこと、の二点を特に強調し、本日の議論を締めくくりたい。

参考資料

学部時代の要望書（担当教員に手渡し）

先生へ

今年度（１年間・春学期・秋学期）下記の授業を履修することになりました文学部社会学科社会福祉学専攻３回生の青木といいます。私は視覚障害（弱視）ですので、講義及び試験の際、次の点についてご配慮をお願いします。

履修するクラス：

お願いしたいこと

（１）授業に関して

- レジュメ、小テスト等については、できるだけ事前に拡大の上、配布してください。
- レジュメのｅメールによる事前提供が可能な場合は、添付ファイルで送っていただきたいと思います。
- 板書はすぐに消さないでください。ただし、授業を進める上でやむを得ないときもあると思いますので、授業後にフォローをお願いしたいと思います。
- 映像教材を使用される際のことですが、字幕ビデオの場合は字幕部分の読み上げ、スライド教材の場合は、スクリーンに映す内容をプリントにして、拡大の上配布していただきたいと思います。

（２）試験

- 拡大版試験問題の配布を希望します。（ただし、用紙のサイズは A3 が最大でお願いします）なお、拡大試験問題の配付希望については、すでに文学部事務室に依頼済みです。
- 長文を読むもの、あるいは調べながら答案を作成する試験に関しては、試験を受ける上で視力的にハンディーがありますので、そのような場合に限って大学側から提供される試験時間の延長措置を受けたいと考えています。ただ、これについては試験問題の内容にも関わってきますので、可能な限りで結構です。

大学院時代の要望書（担当教員に手渡し）

先生へ

今年度（１年間・春学期・秋学期）下記の授業を履修することになりました大学院総合政策科学研究科 1 回生の青木といいます。私は視覚障害（弱視）ですので、講義の際、次の点についてご配慮をお願いします。

履修する科目：

お願いしたいこと

- レジュメ、小テスト等については、事前に拡大の上、配布してください。
- レジュメのｅメールによる事前提供が可能な場合は、添付ファイルで送っていただいても結構です。
- 板書はすぐに消さないでください。ただし、授業を進める上でやむを得ない場合は、授業後にその分のフォローをお願いします。
- 映像教材を使用される際のことですが、字幕ビデオの場合は字幕部分の読み上げ、スライド教材の場合は、スクリーンに映す内容をプリントにして、拡大の上配布してください。
- プレゼンテーション等スクリーンを使用される際、教室内を消灯されますと手元が見えなくなります。このような場合には、事務室から卓上蛍光灯を借りるようにしますので、事前に私か事務室までご連絡ください。

CD-ROM版辞書について

・岩波書店（広辞苑他）　http://www.iwanami.co.jp/hensyu/degi/title/index.html
・三省堂（英和辞典、模範六法他）　http://www.sanseido-publ.co.jp/publ/ep/products.html
・小学館（ランダムハウス英語辞典、Louvre など）
http://ebook.shogakukan.co.jp/index.html
・研究社（リーダーズ＋プラス、英和中辞典など）
http://www.kenkyusha.co.jp/home/CD.html
・大修館書店（ジーニアスなど）　http://www.taishukan.co.jp/

↓

※ 辞書が無くてもネット環境さえあれば…　http://dic.lycos.co.jp/

ネットで楽しめる美術館

・近代デジタルライブラリー（国立国会図書館）　http://kindai.ndl.go.jp/
・貴重書検索（国立国会図書館）　http://www3.ndl.go.jp/rm/
・HUMI プロジェクト（慶應義塾大学）　http://www.humi.keio.ac.jp/